

ごん狐

新美南吉



これは、私がわたし小さいときに、村の茂平もへいというおじいさんから
きいたお話です。

むかしは、私たちの村のちかくの、中山なかやまというところなに小
なお城があつて、中山さまというおとのさまが、おられたそ
うです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐きつね」という狐が
いました。ごんは、一人ひとりぼっちの小狐で、しだの一ぱいしげつ
た森の中に穴をほつて住んでいました。そして、夜でも昼でも、
あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへ入つ
て芋をほりちらしたり、菜種なたねがらの、ほしてあるのへ火をつけ
たり、百姓家ひやくしやうやの裏手につるしてあるとんがらしをむしりとして、

いつたり、いろんなことをしました。

或秋あるあきのことでした。二、三日雨がふりつづいたその間あいだ、ごん

は、外へも出られなくて穴の中にしゃがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほつとして穴からはい出ました。空はからつと晴れていて、百舌鳥もずの声がきんきん、ひびいていました。

ごんは、村の小川おがわの堤つつみまで出て来ました。あたりの、すすきの

穂ほには、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水

が少すくいのですが、三日もの雨で、水が、どつとましていました。

ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩はぎの

株くが、黄いろくにごった水に横だおしになって、もまれていま

す。ごんは川下かわしもの方へと、ぬかるみみちを歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、

見つからないように、そうつと草の深いところへ歩きよつて、そこからじつとのぞいてみました。

ひようじゆう

「兵十だな」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網をゆすぶつていました。はちまきをした顔の横つちように、まるい萩の葉が一まい、大きな黒子ほくろみたいにへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり、網の一ばんうしろの、袋のようになつたところを、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさつた木ぎれなどが、ごちゃごちやはいっていましたが、でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、ふというなぎの腹や、大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみ

と一しよにぶちこみました。そして、また、袋の口をしぼって、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくをもつて川から上り^{あが}びくを土手^{どて}において、何をさがしにか、川上^{かわかみ}の方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中からとび出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなつたのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はり、はり、網のかかっているところより下手^{しもて}の川の中を目がけて、ぼんぼんなげこみました。どの魚も、「とぼん」と音を立てながら、にごつた水の中へもぐりこみました。

一ばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、何しろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれつたくなって、頭をびくの中につっこんで、うなぎの頭

を口にくわえました。うなぎは、キュツと言つてごんの首へまきつきました。そのとたんに兵十が、向うから、

「うわアぬすと狐め」と、どなりたてました。ごんは、びつくりしてとびあがりました。うなぎをふりすててにげようとしたが、うなぎは、ごんの首にまきついたままはなれません。ごんはそのまま横つとびにとび出して一しようにけんめいに、にげていきました。

ほら穴の近くの、はんの木の下でふりかえつて見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほつとして、うなぎの頭をかみくだき、やつとはずして穴のそとの、草の葉の上にのせておきました。

十日ほどたつて、ごんが、弥助やすけというお百姓の家の裏を通り

かかりますと、そのの、いちじくの木のかげで、弥助の家内かないが、おはぐろをつけていました。鍛冶屋かじやの新兵衛しんべえの家のうらを通る

と、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

「何なんだろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやって来ますと、いつの間まにか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢おおぜいの人があつまっていました。よそいきの着物を着て、腰こしに手拭てぬぐいをさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きな鍋なべの中では、何かぐずぐず煮

えています。

「ああ、葬式だ」と、ごんは思いました。

「兵十の家のだれが死んだんだろう」

お午ひるがすぎると、ごんは、村の墓地へ行つて、六地藏ろくじぞうさんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠く向うには、お城の屋根瓦やねがわらが光つています。墓地には、ひがん花びなが、赤い布きれのよううにさきつづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、鐘かねが鳴つて来ました。葬式の出る合図あいずです。

やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやつて来るのがちらちら見えはじめました。話声はなしこえも近くなりました。葬列は墓地へはいつて来ました。人々が通つたあとには、ひがん花が、ふみおられていました。

ごんはのびあがつて見ました。兵十が、白いかみしもをつけ

て、位牌いはいをささげています。いつもは、赤いさつま芋いもみたいな元氣のいい顔が、きょうは何だかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおつ母かあだ」

ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のおつ母は、床とこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり、網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。だから兵十は、おつ母にうなぎを食べさせることができなかつた。そのままおつ母は、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだらう。ちょッ、あんないたずらをしなけりやよかつた。」

兵十が、赤い井戸のところ、麦をといでいました。

兵十は今まで、おつ母と二人ふたりきりで、貧しいくらしをしていたもので、おつ母が死んでしまつては、もう一人ぼっちでした。

「おれと同じ一人ぼっちの兵十か」

こちらの物置ものおきの後うしろから見ていたごんは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向うへいきかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

「いわしのやすうりだアイ。いきのいいいわしだアイ」

ごんは、その、いせいのいい声のする方へ走つていきました。と、弥助やすけのおかみさんが、裏戸口から、

「いわしをおくれ。」と言いました。いわしうり売は、いわしのかご

をつんだ車を、道ばたにおいて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の中へもつてはいりました。ごんはそのすきまに、かごの中から、五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴へ向つてかけもどりました。途中の坂の上でふりかえつて見ますと、兵十がまだ、井戸のところで麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

つぎの日には、ごんは山で栗をどつきりひろつて、それをかかえて、兵十の家へいきました。裏口からのぞいて見ますと、兵十は、午飯ひるめしをたべかけて、茶碗ちやわんをもつたまま、ぼんやりと考えこんでいました。へんなことには兵十の頬ほっぺたに、かすり傷

がついています。どうしたんだらうと、ごんが思っていますと、兵十がひとりごとをいいました。

「一たいだれが、いわしなんかをおれの家へほうりこんでいったんだらう。おかげでおれは、盗人ぬすびとと思われて、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまつたと思いました。かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷までつけられたのか。

ごんはこうおもいながら、そつと物置の方へまわつてその入口に、栗をおいてかえりました。

つぎの日も、そのつぎの日もごんは、栗をひろつては、兵十の家へもつて来てやりました。そのつぎの日には、栗ばかりでなく、まつたけも二、三ぼんもつていきました。

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶらあそびに出かけました。中山さまのお城の下を通つてすこしいくと、細い道の向うから、だれか来るようです。話声が聞えます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

ごんは、道の片がわにかくれて、じつとしていました。話声はだんだん近くなりました。それは、兵十と加助かすけというお百姓でした。

「そうそう、なあ加助」と、兵十がいいました。

「ああん？」

「おれあ、このごろ、とてもふしぎなことがあるんだ」

「何が？」

「おつ母が死んでからは、だれだか知らんが、おれに粟やまつたけなんかを、まいにちまいにちくれるんだよ」

「ふうん、だれが？」

「それがわからんのだよ。おれの知らんうちに、おいていくんだ」

ごんは、ふたりのあとをつけていきました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。その粟を見せてやるよ」

「へえ、へんなこともあるもんだなア」

それなり、二人はだまつて歩いていきました。

加助がひよいと、後を見ました。ごんはびくつとして、小さくなつてたちどまりました。加助は、ごんには気がつかないで、

そのままさつきとあるきました。吉兵衛きちべえというお百姓の家まで来ると、二人はそこへはいつていきました。ポンポンポンと木魚もくぎよの音がしています。窓の障子しょうじにあかりがさして、大きな坊主頭ぼうずあたまがうつつて動いていました。ごんは、

「おねんぶつがあるんだな」と思いながら井戸のそばにしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほど、人がつれだつて吉兵衛の家へはいつていきました。お経を読む声がきこえて来ました。

五

ごんは、おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、また一しよにかえつていきます。ごんは、

二人の話をきこうと思つて、ついでいきました。兵十の影法師かげぼうしをふみふみいきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「さっきの話は、きつと、そりやあ、神さまのしわざだぞ」

「えつ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずつと考えていたが、どうも、そりや、人間じゃない、神さまだ、神さまが、お前がたつた一人になったのをあわれに思わつしやつて、いろんなものをめぐんで下さるんだよ」

「そうかなあ」

「そうだと。だから、まいにち神さまにお礼を言うがいいよ」

「うん」

ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思ひました。おれが、

栗や松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはお礼をいわないで、神さまにお礼をいうんじゃア、おれは、引き合わないなあ。

六

そのあくる日もごんは、栗をもつて、兵十の家へ出かけました。兵十は物置で縄なわをなっていました。それでごんは家の裏口から、こっそり中へはいました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいつたではありませんか。こないだうなぎをぬすみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。

「ようし。」

兵十は立ちあがって、納屋なやにかけてある火縄銃ひなわじゆうをとって、火薬をつめました。

そして足音をしのばせてちかよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。ごんは、ばたりとたおれました。兵十はかけよって来ました。家の中を見ると、土間どまに栗が、かためておいてあるのが目につきました。

「おや」と兵十は、びっくりしてごんに目を落しました。

「ごん、お前まいだったのか。いつも栗をくれたのは」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は火縄銃をばたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口つつぐちから細く出ていました。

ごん狐

ごん狐

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成 8）年 7 月 16 日発行第 1 刷

1997（平成 9）年 7 月 15 日発行第 2 刷

※入力時に使われた底本が不明とのことなので、表記は岩波文庫版に合わせて。

入力：林裕司

校正：浜野智

1998 年 10 月 23 日公開

2004 年 2 月 22 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。